

アメリカの音楽科教科書にみられる聴取能力の育成方法

—『全米芸術教育標準』との関連性に着目して—

栗木 陽子

(本講座大学院博士課程前期在学)

The Training for the Listening Ability in American Music Textbooks: Paid to Relations of the National Standards for Arts Education

Yoko AWAKI

Abstract

The purpose of this study is to examine the listening ability and the characteristic of the way that training found in American music textbook series *Silver Burdett Making Music* (2008) published by Pearson Scott Foresman. Especially in this study, listening activities seemed in the textbooks are analyzed through comparing with National Standards for Arts Education. It was revealed from the analysis that the important things for listening activities is to gesture to music and acquire technical knowledge of music in the lower grades. The former connected with description using appropriate terminology and analysis the elements in music representing diverse genres and cultures after Grade-5. The latter helped learning the uses of elements of music in the upper grades. In conclusion, it is clear that the editors of this textbook series expect learners to get the skills for analyzing, playing, and evaluating music by connecting the terminology and knowledge of music with aural example.

1. はじめに

近年アメリカでは、各教科における教科書の内容量が増加する傾向にある。アメリカの代表的な音楽科教科書 *Silver Burdett Making Music* シリーズ (以下、*Making Music* と略記) も例外ではなく、10 学年分の教科書には、膨大な量のレッスンが設けられている。これらのレッスンでは、複数の教材と多様な活動によって学習内容が構成されている。その中でも、聴取 (Listening) の活動は、器楽や歌唱とともに教科書内で高い割合を占めており、さらに、高学年になるとともにその数は増していく。これらのことから、*Making Music* (2008) における聴取活動は、学習の発展とともにその重要度を増していくと推測できる。

しかしその一方で、音楽の授業数が削減されつつあることも、アメリカの音楽科教育において注目すべき点である。このことから、*Making Music* シリーズのように膨大な内容量をもつ教科書は、そのすべてを学習することが難しいといえる。つまり、教科書における学習の系統性がいくら緻密なものであっても、実際の教育現場ではそれを十分に活用できないという実態が推察できるのである。このようなミスマッチを改善するためには、教科書編集者側による善処も不可欠であるが、指導者側にも、教科書の編集者側が意図した指導内容の系統性について十分に理解したうえで、児童生徒の実態を考慮しつつ、柔軟に対応する力が求められるのではないであろうか。

そこで本研究では、*Making Music* (2008) における聴取活動に焦点を当て、児童生徒に求められている聴取能力や、その育成方法を明らかにすることを目的とする。なお、本研究では教科書で示された聴取活動と『全米芸術教育標準』(National Standards for Arts Education) との関連性に着目する。各レッスンに示されている『標準』の項目から、聴取活動において求められている能力の詳細や、それに付随する

活動について検討していく。

2. 『全米芸術教育標準』の概要

『全米芸術教育標準』（以下、『標準』と略記）とは、1994年に全米音楽教育者協議会（Music Educators National Conference）らによって作成された全米の芸術カリキュラムである。このカリキュラムは、舞踊・音楽・舞台芸術・視覚芸術の4つの芸術分野において、児童生徒が、それぞれの段階に応じて習得すべき知識と技能についてまとめられている。法的拘束力はないものの、アメリカの各州はこの『標準』を目安として、それぞれのカリキュラムを作成している。

『標準』における音楽の分野は、9つからなる内容標準（Content Standard）によって構成されている。以下、『標準』における9つの内容標準について列記する。

1. 歌唱：さまざまなレパートリーの独唱または合唱
2. 器楽：さまざまなレパートリーの独奏または合奏
3. 即興：旋律、変奏、伴奏の即興
4. 作曲と編曲：ガイドラインに沿った作曲および編曲
5. 読譜と記譜
6. 聴取、分析、描写
7. 評価：音楽と演奏の評価
8. 音楽と他の芸術、芸術以外の教科との関連性の理解
9. 音楽と歴史、文化との関連性の理解

さらにこれらの9領域の下には、数項目からなる達成標準（Achievement Standard）が存在する。*Making Music*（2008）は、この『標準』に準拠した教科書であり、指導書には各レッスンと関連する『標準』の達成標準が明記されている。例として、第1領域〈歌唱〉について示す。なお、『標準』はGrades K-4, Grades 5-8, Grades 9-12の3段階にまとめられているが、今回は*Making Music*（2008）シリーズに対応するGrades K-4, Grades 5-8の2段階のみを示す。

内容標準

1. 歌唱：さまざまな音楽のレパートリーを1人で、あるいは複数で歌唱する

達成標準

< Grades K-4 >

- (a) 正しい音程やリズム、適切な音色、発声、姿勢で、一定のテンポを維持しながら1人で歌う。
- (b) 適切な強弱、フレーズ、解釈を用いて、表情豊かに歌う。
- (c) 多様な文化のジャンルや様式を表すレパートリーの中から暗譜して歌う。
- (d) オスティナート、パートナーソング、輪唱を歌う。
- (e) グループで、強弱の程度や声色を合わせ、指揮者の指示に従って歌う。

< Grades 5-8 >

- (a) 1人であるいは大小編成のアンサンブルで、自身の音域内で歌える曲を、正確に息をコントロールして歌う。
- (b) 「技術レベル2」の歌唱曲のレパートリーを、暗譜で歌う曲を含めて、表情豊かに、かつ正確に歌う。
- (c) 多様なジャンルや文化を表している音楽を、表情豊かに、かつその作品にふさわしいように歌う。
- (d) 2声、3声の音楽を歌う。
〔合唱アンサンブル〕
- (e) 「技術レベル3」の歌唱曲のレパートリーを、暗譜で歌う曲を含めて、表情豊かに、かつ正確に歌う。

3. *Making Music*（2008）の概要および分析方法

Making Music シリーズは、2002年にPearson Scott Foresman社から出版された。2005年に1度改訂されたのち、現在では2008年改訂版が、Pre-K, Grade-K および Grades 1-8の計10学年分シリーズとして出版されている。

Making Music（2008）には、1学年につき150前後のレッスンが設けられており、それらのレッスンは12のユニット、または9つのモジュールによってグループ化されている¹⁾。各レッスンの学習内容は、「発想」「形式」「旋律」「リズム」「テクスチュアと和声」「音色」の6種類からなる学習要素（Elements）と、

器楽 (Playing) や歌唱 (Singing) などの音楽的技能 (Skills) によって、大まかに示されている。

教師用指導書には、各レッスンに設定されている学習要素と技能について簡潔にまとめた一覧表が示されている。例として、Grade-1 のユニット 1・レッスン 3 の一覧表を表 1 に示す。

表 1 Grade-1 のユニット 1・レッスン 3 の一覧表

レッスン	学習要素	技能
3. 一定に保とう	学習要素：リズム 学習概念：拍 重点：一定の拍とそうでない拍 二次的な学習要素 発想：速度 【標準】 1c・2a・6b・6c・8b	技能：聴取 目的：楽曲における一定の拍を理解する 二次的な技能 ・動作 ・聴取 ・歌唱 ・器楽 補強的な技能 ・聴取／創作 ・聴取／動作

各レッスンにおける学習要素は、学習概念 (Concept) や、学習要素における重点 (Focus) によって、具体的に示されている。学習概念は、レッスンによって 1 つだけ設定されている場合も、複数設定されている場合もある。一方で技能は、主だったもの (Main Skill)、二次的なもの (Secondary Skills)、補強的なもの (Skills Reinforcement) と、段階別に表示されている。

今回は、聴取活動に着目するため、主に身につけるべき技能 (_____の部分) に聴取およびそれに関連するもの²⁾ が設定されているもの (以下、聴取レッスンと示す) を分析対象とする。各聴取レッスンの一覧表を参考に、以下のように分析を進める。

- ① 各聴取レッスンに設定されている『標準』 (_____の部分) を、9 つの領域ごとに分類する。
- ② 分類した『標準』のうち、特に聴取に関連するものとして、第 6 領域<聴取・分析・描写>と第 7 領域<評価> (_____の部分) を抜き出す。第 6 領域および第 7 領域の達成標準の設定数およびその割合を、6 つの学習要素ごとに算出する。
- ③ ②の結果をもとに、*Making Music* (2008) において求められている聴取能力の詳細について考察する。

4. *Making Music* に記載されている『標準』

(1) 第 6 領域<聴取・分析・描写>

『標準』の第 6 領域において設定されている達成標準は、次の枠内に示したとおりである。

<p>内容標準</p> <p>6. 聴取・分析・描写：音楽を聴取・分析・描写する</p>
<p>達成標準</p> <p>< Grades K-4 ></p> <p>(6a) 提示された音楽を聴いて、単純な音楽形式がわかる。</p> <p>(6b) 多様な文化を代表する様々な様式の音楽を聴いて、動作・発問に対する答え・特徴の説明によって知覚能力を証明する。</p> <p>(6c) 音楽・楽譜・楽器・声・演奏について説明するときに、適切な専門用語を用いる。</p> <p>(6d) 子どもの声、大人の男声と女声だけでなく、オーケストラやバンドの中のたくさんの楽器や、多様な文化における楽器の音色がわかる。</p> <p>(6e) 音楽を聴きながら、重要な音楽の特徴や特定の音楽的变化を、動き (揺れる・スキップする・芝居のような動きなど) を通して表現する。</p> <p>< Grades 5-8 ></p> <p>(6a) 与えられた音楽における特定の音楽的变化の特徴を、適切な専門用語を用いて説明する。</p> <p>(6b) 多様なジャンルや文化を代表する音楽における、音楽的要素の使われ方を分析する。</p> <p>(6c) 音楽の分析において、拍子・リズム・調性・音程・和音・和声進行の基本原則の知識を証明する。</p>

なお、Grades K-4における(6b)はGrades 5-8における(6a)との連続性があり、Grades K-4における(6c)はGrades 5-8における(6c)と連続性がある。また、Grades K-4における(6a)と(6d)は、Grades 5-8において連続性のある項目は存在しないが、より複雑で高度な学習を行うよう示されている。さらに、Grades 5-8における(6c)は、Grades K-4で学習する内容と関連はあるものの、発展性を示すには適切ではないことが示されている。

Grades K-4における聴取レッスンに設定された『標準』の中から第6領域を抜き出し、学習要素別に設定数を算出したものが、表2である。なお、各学習要素における最大数を網かけで示した。

表2 Grades K-4における第6領域の学習要素別設定数

学習要素 \ 達成標準	6a	6b	6c	6d	6e	合計
発想	1	4	3	2	2	12
形式	4	5	1	1	3	14
旋律	0	13	1	3	6	23
リズム	1	4	1	1	6	13
テクスチャと和声	6	26	6	7	17	62
音色	1	29	14	32	6	82
合計	13	81	26	46	40	206
平均	2.17	13.50	4.33	7.67	6.67	34.33

表2に基づいて、設定数の学習要素別割合を図1に示す。

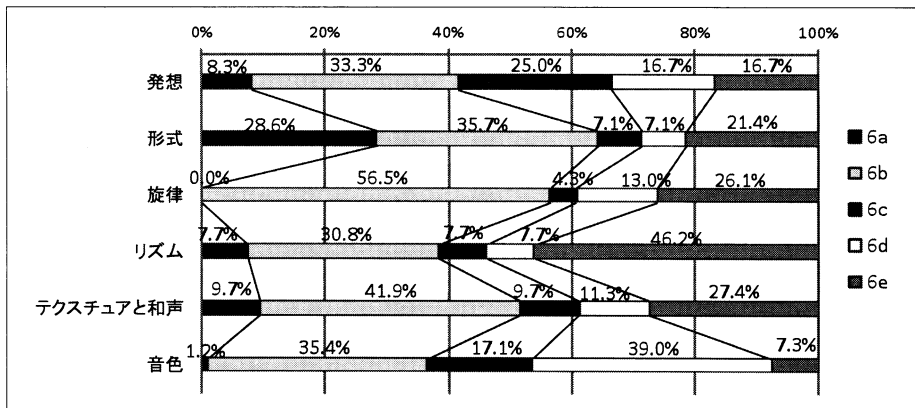


図1 Grades K-4における第6領域の学習要素別割合

図1から、Grades K-4では、5つの達成標準のうち、身体動作と関係する(6b)や(6e)の項目が頻出していることがわかる。これらの項目において設定率の高い要素としては、「旋律」「リズム」「テクスチャと和声」が挙げられる。特に、(6b)の割合が高い「旋律」では、学年が上がるにつれて、身体表現のほかにも、高い音と低い音とをグループ分けしたり、旋律線の変化を言葉で説明したりといった、論理的な思考に基づいた聴取活動が展開されている。また、(6e)の割合が高い「リズム」では、曲の拍子に合わせて歌詞の内容に即した動作を行ったり³⁾、パパーヌやポルカの2拍子に合わせて踊ったりなどの活動が指導書に示されており、聴取したものを感覚的・即興的に表現する能力が重視されていることがわかる。

一方で、(6b)や(6e)の設定率が低い「発想」や「音色」では、(6c)の設定率が高くなる傾向にある。該当する聴取レッスンでは、さまざまな楽器の音色を聴取し、楽器の構造や発祥国などを調べてグループ分けをする活動や、複数の楽曲を聴取したのちに強弱や速度といった特徴を図表にまとめ、共通点や相違点を見つける活動など、それぞれの要素における知識の定着につながるような活動が多くみられた。言い

換えれば、聴取した内容を知識として取り込んだのちに、記述や図示を通してそれらを応用、定着させる過程が意図されているとも考えられるのである。

続いて、Grades 5-8 における聴取レッスンに設定された『標準』の中から第6領域を抜き出し、学習要素別に設定数を算出したものが、表3である。なお、各学習要素における最大数を網かけで示した。

表3 Grades 5-8 における第6領域の学習要素別設定数

学習要素	6a	6b	6c	合計
発想	11	10	2	23
形式	8	10	5	23
旋律	8	12	3	23
リズム	4	4	0	8
テクスチャと和声	5	10	3	18
音色	20	44	3	67
合計	56	90	16	162
平均	9.33	15.00	2.67	27.00

続いて、表3の学習要素別割合を図2に示した。

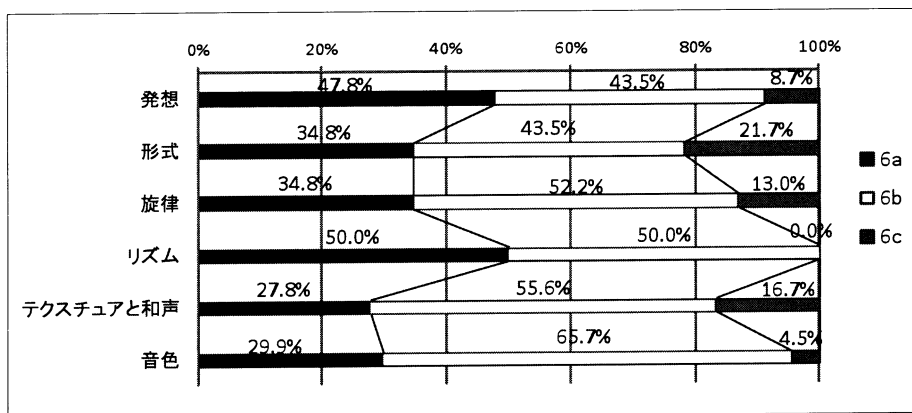


図2 Grades 5-8 における第6領域の学習要素別割合

Grades 5-8 の達成標準では、Grades K-4 における (6d) のような、声色や楽器の音色そのものに着目する項目が欠如している。それをふまえると、3つの達成標準の内容をみる限り、聴取活動の着眼点は「楽曲構成の分析」へ移行しているといえる。その中でも、表3から、全体的に (6b) が最も多く設定されていることがわかる。つまり、楽曲構成の分析を通して、多様なジャンルや様式の音楽の特徴を理解することが重視されているのである。特に、「音色」「テクスチャと和声」「旋律」においては、エレキギターとアコースティックギターの音色を聴き比べて相違点を説明することによって、ポップスの音楽の特徴を考えたり、さまざまな様式のジャズを聴き比べ、ジャズ全体の特徴と様式ごとの特徴について理解したりする活動が充実しており、(6b) の設定率を上げる要因となっているといえる。つまり、これらの要素は、音楽のジャンルや様式を理解する切り口としての役割を担っているのである。

さらに、図2から、「形式」「テクスチャと和声」に関しては、他の学習要素と比較して、(6c) の設定率が比較的高いことがわかる。これらに関するレッスンでは、変奏曲の分析をする際に、拍子や強弱の変化に着目したり、楽曲のテクスチャを分析する際に、特定の楽器の音色に絞って、各パートの役割を判別するなど、複数の要素が混ざり合った聴取活動が展開されている。これによって、「形式」「テクスチャと和声」では、これらの要素に特有の知識だけでなく、音楽の諸要素に関する幅広い知識とも関わらせ

ながら聴取能力が育成されると考えられる。

各学習要素における(6a)の設定率に着目すると、「発想」「リズム」における値が高く、ともに各学習要素における第6領域の約半分を占めている。例えば、ワールドミュージックについて学習するレッスンでは、アフリカの音楽の影響を強く受けているセクションと、アメリカのジャズに基づくセクションとが混在する楽曲⁴⁾を聴取し、リズムやテクスチュアの変化を分析することで、それぞれの特徴を理解する学習が行われる。このように、1曲の中での変化、あるいは時代や社会の変化に伴う影響に着目しながら聴取し、かつ専門用語などの知識と組み合わせて分析することが求められているのである。

(2) 第7領域<評価>

『標準』の第7領域<評価>における達成標準は、Grades K-4, Grades 5-8ともに2つの項目が存在する。各項目の内容は、以下のとおりである。

<p>内容標準</p> <p>7. 評価：音楽や演奏を評価する</p>
<p>達成標準</p> <p>< Grades K-4 ></p> <p>(7a) 演奏や作曲を評価するための基準を考案する。</p> <p>(7b) それぞれの特定の音楽作品および様式の表現を、適切な音楽の専門用語を用いて説明する。</p> <p>< Grades 5-8 ></p> <p>(7a) 曲の演奏や作曲の質や有効性を評価するための基準を開発し、各自の聴取および演奏の評価に用いる。</p> <p>(7b) 音楽様式の特定の適切な基準を用いたり、改善に役立つ意見の提案をしたりすることによって、自身や他人の演奏や作曲、即興の質や有効性を評価する。</p>

なお、Grades K-4における2項目は、Grades 5-8における(7a)と関連があることが示されている。上記の項目における学習要素別設定数のうち、Grades K-4については表4に示す。同様に、Grades 5-8については表5に示す。なお、各学習要素における最大数を網かけで示した。

表4 Grades K-4における第7領域

学習要素 \ 達成標準	7a	7b	合計
発想	1	1	2
形式	0	0	0
旋律	1	0	1
リズム	1	0	1
テクスチュアと和声	3	1	4
音色	1	5	6
合計	7	7	13
平均	1.17	1.17	2.33

表5 Grades 5-8における第7領域

学習要素 \ 達成標準	7a	7b	合計
発想	7	3	10
形式	1	0	1
旋律	2	1	3
リズム	0	0	0
テクスチュアと和声	3	1	4
音色	11	5	16
合計	24	10	34
平均	4.00	1.67	5.67

表4から、Grades K-4における(7a)と(7b)の間には、はっきりとした差はみられなかった。これらの項目が設定されているレッスン数も少ないため、この段階では、楽曲や演奏を聴取すること自体を重視しており、さらにそれら进行评估する能力までは求められていないと推測できる。ただし、「音色」については、(7b)の設定数が比較的多く、低学年のうちからある程度聴取活動を高度化させる傾向があると考えられる。該当する聴取レッスンでは、フォークソングを対象に、使用される楽器の音色について、「好きかどうか、何故そう思うのか」を説明する活動が例示されており、自分なりに価値を見だし、考えをもつ姿勢を育てるために、聴取活動を行うとみられる。

表5から、Grades 5-8では、2つの項目のうち、(7a)の「演奏や作品の質および有効性を評価するための基準を開発し、各自の聴取や演奏への基準として用いる」項目のほうが多く設定される傾向にあるこ

とがわかる。なお、この段階では、各学習要素によって第7領域との関連性にばらつきがみられた。「発想」と「音色」は、評価の活動との関連性が強く、逆に、「リズム」や「形式」を学習するレッスンでは、評価の活動との関連は弱いと考えられる。「発想」や「音色」に関する聴取レッスンでは、MIDIデータを用いて楽曲の速度を変化させながら聴取し、どのくらいの速度が適切か考える活動や、さまざまな歌手の歌い方、声質、雰囲気などの違いを、グループで話し合って評価する活動がみられることから、楽曲の表現に対して幅広く着眼点を置いていることがわかった。

5. 考察

Making Music (2008) の聴取レッスンに設定された『標準』について分析した結果、この教科書シリーズにおける聴取能力の育成について、以下のようにまとめることができた。

低学年における聴取能力と結びつきの強い学習は、「身体動作による表現」と、「音楽用語などの知識の定着」に大別できる。前者は、リズムや旋律を聴取する場面で多用される学習方法であり、Grades 5-8において、適切な専門用語を用いての説明や、多様な文化やジャンルの音楽についての構成分析へと発展する傾向にある。つまり、聴取した音楽を模倣する活動が、結果的に音楽の知識や分析能力につながると考えられる。また、後者は、発想や音色を聴取する場面で多くみられる学習方法であり、Grade-5以降において、各音楽要素の使われ方の分析へと移行するようになっている。このことから、音楽用語や音楽の構成要素に関する知識を、実際に聴取した内容と結びつけることによって、その後の演奏技能や楽曲を分析する能力、ひいては、楽曲や他者の演奏を評価する力をも充実させようとする、教科書編集者側の意図がうかがえた。

6. おわりに

本研究では、*Making Music* (2008) において求められている聴取能力やその育成方法を分析するにあたって、『標準』の第6領域および第7領域との関連性に着目した。『標準』はGrades K-12を3段階に分割したカリキュラムであるため、本研究では、対応する『標準』の各段階と照合し、9学年を2つの段階に大別して考察した。今後は、*Making Music*に例示されている学習内容やその方法を学年ごとに分析し、教科書編集者側が意図した学習の過程を、より詳細に分析したいと考える。

注

- 1) Grades K-6では12のユニット、Grades 7-8では9つのモジュールによってまとめられている。
- 2) 『標準』に示された内容を参考に、聴取と関連する技能を、分析 (Analyzing)、描写 (Describing)、評価 (Evaluating) とした。これらが設定されたレッスンのうち、聴取活動が行われているものを分析対象に加えた。
- 3) 例えば、Woody Guthrie 作詞作曲の「Bling Blang」が教材として掲載されている。のこぎりやかなづちで鳥小屋を作るという内容の歌詞であり、指導書では、曲のリフレイン部分の拍に合わせて、これらの工具を使用する動作をするよう指示がある。
- 4) Herbie Hancock 作曲「Watermelon Man」が教材として用いられている。この作品の最初と最後には、アフリカのビグミーに由来するポリフォニックなテーマが用いられている。

引用・参考文献

- Beethoven, Jane. et al. (2005). *Silver Burdett Making Music 2008 Edition, Grade-K Teacher's Edition*. Illinois: Pearson Scott Foresman.
- Beethoven, Jane. et al. (2005). *Silver Burdett Making Music 2008 Edition, Grade-1 Teacher's Edition*. Illinois: Pearson Scott Foresman.
- Beethoven, Jane. et al. (2005). *Silver Burdett Making Music 2008 Edition, Grade-2 Teacher's Edition*. Illinois: Pearson Scott Foresman.
- Beethoven, Jane. et al. (2005). *Silver Burdett Making Music 2008 Edition, Grade-3 Teacher's Edition*.

- Illinois: Pearson Scott Foresman.
- Beethoven, Jane. et al. (2005). *Silver Burdett Making Music 2008 Edition, Grade-4 Teacher's Edition*. Illinois: Pearson Scott Foresman.
- Beethoven, Jane. et al. (2005). *Silver Burdett Making Music 2008 Edition, Grade-5 Teacher's Edition*. Illinois: Pearson Scott Foresman.
- Beethoven, Jane. et al. (2005). *Silver Burdett Making Music 2008 Edition, Grade-6 Teacher's Edition*. Illinois: Pearson Scott Foresman.
- Beethoven, Jane. et al. (2005). *Silver Burdett Making Music 2008 Edition, Grade-7 Teacher's Edition*. Illinois: Pearson Scott Foresman.
- Beethoven, Jane. et al. (2005). *Silver Burdett Making Music 2008 Edition, Grade-8 Teacher's Edition*. Illinois: Pearson Scott Foresman.
- Consortium of National Arts Education Associations (1994). *National Standards for Arts Education: What Every Young American Should Know and Be Able to Do in the Arts*, Maryland: Rowman & Littlefield Education.
- 寺園智美 (2004) 「アメリカの音楽科教育における評価に関する一考察」『広島大学大学院教育学研究科音楽文化教育学研究紀要』XVI, pp. 149-161.
- 本間政雄, 高橋誠編 (2000) 『諸外国の教育改革—世界の教育潮流を読む 主要6か国の最近動向—』ぎょうせい.
- 森田恭子 (1995) 「アメリカの『全米芸術教育標準 (National Standards for Arts Education)』の現代的要素—その新しい学力観を探る—」『武蔵野音楽大学研究紀要』第27号, pp. 155-164.